

討議の概要

質： つまづきを生かすとはどういうことなのか。

応答： つまづきを生かすとは 誤答が出たときに、どう生かすか。 分析を生かす。の2通り考えられる。 については、誤答をあえて表出することでそのよさが浮き彫りになり、算数の本質に迫れると考える。 については、授業の後半に評価カードをかかせ、自分はこの部分でつまづいているという自己分析ができるように支援している。

質： 本時はわり算の考えが入っているので前時と意識が繋がっていないのではないか。

応答： かけ算のお店を出そうという共通の場の設定をすることで、「ばらばらのものをお店に出すためには のいくつか分としてまとまりをつくらなければならない」という意識をもせたことでスムーズに展開できた。また、「1つ分のを決めれば、いくつ分が決まる」という考えにも気付かせることができた。

質： 少人数指導後の子どもの感想で「すぐに教えてくれるから好きだ」というのがあったがそれについてどう思うか。

応答： 2つの側面があると思う。1つは一斉授業と比べて、困ったときには先生がすぐに対応してくれるというプラスの側面。もう1つは、すぐに対応しすぎて子どもの思考する時間をうばってしまうというマイナスの側面である。教師はそれらのことを視野に入れて個に応じた支援をしていかなければならない。

意見： 現3年生が2年生の時にどんなつまづきの傾向があったのかを分析して現2年生の指導に生かす等、全体のつまづきの分析はたいへんよくできていて参考になる。しかし、日々の授業においては「式はできても図にできない」「図はできて説明できない」等、学び方の面でもつまづきが見られ、個々で違いがある。それらに対してどう対応していくかが教師の課題でもあるし、授業の力量の表れでもある。

意見： かけ算とわり算は、 $\times =$ の求める場所が違うだけであって関連が深い。2年生の段階で24を扱って 2×12 を生み出したのは、それまでの具体物を使った操作活動の繰り返しが生きている。

意見： 指導案の子どもの反応である「 2×6 と 6×2 が、 3×4 と 4×3 とは似ている」「図はどれも四角の形をしている」は、意識が具体から抽象に向かっている表れである。

(3) 指導の概要

かけ算とは「3や4など、もとになる数のまとまりを、くりかえし数える」ことである。1950年頃からの教科書の挿絵を分析しても のかたまりが 自分が徐々に見えやすく改良されてきている。

次につまづきについてである。なぜつまづくのであろうか。それは理解の発達段階があるからである。

例えば、「 $3 \times 4 = 12$ 」という数字で表すと $1 \ 1 \ 1 \ 1$ 1 数えた結果を5とよぶ」という数の認識にお

いても簡単に理解できる子もいれば、そうでない子もいる。 $3 \times 4 = 12$ という式をよんでも、3と12は具体物で説明できるが、4は行為の認識であるがゆえ、簡単には理解できない。系統的にスモールステップで学習を展開してもある子どもにとっては飛躍しているのである。

ゆえに、算数にある飛躍の中に、系統性をもって教える基礎・基本があると考え。単元の中でも重点指導項目を置き、徹底して学習していくことが大切である。

財田中小学校のつまづきに視点を当てた研究は素晴らしい。つまづきを洗い出すことはよくあるが、それをどう生かすかを研究しているところは少ないので、しっかり研究を深めて財産をつくってほしい。

